

# AR CA DIA

73  
WINTER 2017

## Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



岡崎市美術博物館

# 眼の極楽② 花と鳥のかたち

館長 榊原悟

## 花鳥の変

狩野派の「牡丹図」と云って、誰もが即座に思い浮かべるのは大覚寺宸殿牡丹の間のそれであろうか。いまを盛りと咲き誇る紅白の牡丹が印象深く、狩野山楽（五五九〜一六三五）の代表作として名高い。根元から幹枝を扇状に立ち上がらせた安定感ある樹形や、特異な皴法になる奇岩も面白い。それら株立ちする牡丹と岩が、所与の画面に整然と配される。絵師山楽の構成力の為せる技なのだろうが、同時にここに描かれた光景が、人の手の加わった庭園の一光景であることを物語る。しかも金箔を全面に押した輝くばかりの金地の効果によって、描かれた牡丹はくつきりと、その姿を現す。蕪村の「金屏・牡丹」は「瞬これ詠んだのでは、と思わせるのだが、残念ながらこちらは襖絵、屏風ではない。

ではこれはどうだろう。「牡丹孔雀図」、むしろ金屏風である（図1 滋賀・永源寺蔵）。大覚寺の「牡丹図」のそれにも通じるかたちの奇岩（太湖石）が登場するところから、山楽の影響下にあった次世代の京狩野派の作と見ること衆目一致する。群青の水面が両隻の図様を繋ぐ。その上方、わずかに金雲の棚引くさまが写されるが金地化が著しく、もはや惣金地の屏風と変らない。その輝く金地に牡丹が咲き、孔雀が尾羽をひらく。餌をついばむ。これもまたいずれかの庭園であろう。そのイメージは、舶載された明代の庭園雅集図、例えば明の画家仇英の『金谷園図』（図2『桃李園図』と対をなす 知恩院蔵）などに示された、孔雀が遊び牡丹が咲く庭園のありさまを原図にしているのかも知れない。いや、さらに慶長十一年（一六〇六）豊臣秀頼（一五九三〜一六一五）の力で開板された『帝艦図説』（和刻本）のうち「不用利口図」に描かれた漢・文帝の「上林苑」からの図様の直接的影響も否定できない。そこでは遊ぶ鳥が孔雀から鶴となっているものの、太湖石とその後ろに牡丹を咲かせた組合せは、永源寺本のそれと思わせる。

周知のように、『帝艦図説』は、明の万曆元年（一五七三）幼い皇帝神宗の治政のための勸戒の書としてまとめられたもの。刊行されるや舶載され、それを元に出されたの

## ESSAY

が秀頼版『帝艦図説』であったが、刊行に当っては版型の違いのため、収載図の図様を改変する必要が生じた。「不用利口図」について云えば、牡丹・太湖石を追加したことが、その最大の変更だろうか。面白いのは、その秀頼版の図様の改変に山楽か、その門人が係わっているとの説があることである（相見香雨『京狩野三代記』『美術新報』四七号）。これには異論もあるようだが、問題の牡丹・太湖石が永源本のそれとかたちを通じて見ていることから、相見説をとるべきだろう。漢・文帝の庭園に最も相応しいものとしてこの図様が加えられたに違いない。

そう云えば大覚寺の『牡丹図』にも「緑衣紅鬚」（大江佐国「聞大宗商人献鸚鵡」岩波文庫『王朝漢詩選』所収）の鸚鵡が萱草と共に描かれているではないか。鸚鵡もまた鸚鵡同様舶載された鳥、萱草ともどもいづれも唐めきたるものである。それらが牡丹と共に描かれる。むしろ牡丹も唐めきたる花であったからで、言わば永源寺本「牡丹孔雀図」は唐めき尽しの金屏風と称してよいだろう。その金屏風を「かな書の詩人」蕪村に見せたならば、「金屏・牡丹」のあの一句を詠んだのでは、それに蕪村には近江路に友人の存在を思わせる句が多いことから、永源寺に立ち寄り屏風を見るのは可能なのでは—そんな想像も愉しいが、そもそも描かれた牡丹を詠んだものかさえ定かでない以上、さらに憶測を重ねることは厳に慎しむべきだろうか。

とは云え、なおこの永源寺本にこだわりたいのは、これがほぼ牡丹のみで二図を構成している点に注目したいからである。すでに元信の白鶴本をはじめ狩野派の「四季花鳥図」で夏を象徴する花として取上げられ続けた牡丹である。それがついに単独で描かれるまでになったのである。時代の牡丹愛好熱の高まりの結果であろうが、同じ花でありながら牡丹を見る眼には、時代によってかなりの違いがあったようだ。

その牡丹。古名をフカミグサ、別にハツカグサとも云う。初め薬草として渡来したが、平安時代になると鑑賞花となつたらしい（松田修著『古典植物辞典』講談社学術文庫二〇〇九年）。清少納言が、この花について、

台の前に植えられたりける牡丹のからめきをかしきこと

『枕草子』(能因本)二四三段「殿などのおはしまさて後」と述べたのも、そうした牡丹の由来を承知していたからに他なるまい。「唐めき女子」清少納言が牡丹にときめいたと云うのである。

以後、この花は王朝貴族に少なからず愛でられた。道長は法成寺御堂の御前に薔薇や唐瞿麥などと共に植栽したようだし、『栄花物語』第十八玉の臺、それでなくても花好きの定家に至っては『明月記』に庭の牡丹開花のことをしばしば記す中で、

牡丹花盛開 此花逢端午日 年来不見之 瞿麥此間漸綻

寛喜元年(二二九)五月五日の条

と述べている。毎年(毎年)のことであればこそなのだろうが、その開花を常に気にかけていた。しかし、そうして愛でられた牡丹も、歌に詠まれることは意外な程少ない。寡開にして定家の牡丹歌は知らない。

咲きしより散りはつるまで見しほどに 花のもとにて二十日へにけり

形見とて見れば嘆のふかみ草 何なかなかのほひなるらむ

前者は『詞歌和歌集』巻第二春(のちには夏の草花の代表となる牡丹も、和歌の世界では春の花とされることが多い)より藤原忠通(一〇九七―二六四)の、後者は『新古今和歌集』から藤原重家の歌である。他にも『夫木和歌集』の春に牡丹歌が収められているが、いずれも牡丹の異名を懸詞とする点で変わりなく、お世辞にも名歌とは云えまい。唐めきたる牡丹の豊麗さが、どうにも三十二文字の歌(ころと)相性が悪かったからだろうか。琳派と牡丹との疎遠な関係を思い出す。

だがその点は絵についても同じで、そもそも牡丹が登場するような世俗画の、平安・鎌倉期にまで遡る遺品が無い現時点では、牡丹が描かれなかったと断言することはできないにしても、余り取上げられなかったのは間違いないだろう。絵巻にもほとんど登場しない。

いや、明らかにそれと分かるように描かれた一例があった。しかも蝶まで添えられている。『華厳宗祖師絵伝』(高山寺蔵)のうち「義湘絵」巻二、新羅の僧義湘が求法のため入唐し、長安の至相寺に智儼(至相大師)を訪ねる場面である。門を入ると見事な太湖石のかたわら紅の牡丹が咲き誇っている。遠路はるばる義湘を訪れた、こここそがまさしく唐の長安だと言わんばかりである。牡丹には、そして太湖石にはやはり唐め

## ESSAY

きのイメージが常にあつたのである。

そして近世。牡丹が本格的に描かれ始める。それも輝く金と極彩色に彩られて。元信はじめ狩野派の筆にかかる「四季花鳥図」がそれである。いや、そうした「四季花鳥図」に大きな影響を与えた雪舟系の「花鳥図」に既に牡丹が登場しているから

(例えば東京国立博物館本の伝雪舟筆「四季花鳥図屏風」)、この花を最初に取上げたと言う栄誉は、それら雪舟系「花鳥図」にあるのだろう。だがその牡丹をさらに大きく育て上げ、大輪の花を咲かせた結果、「花鳥図」の主役の一つにまでするのは、元信⇨狩野派の「四季花鳥図」の成立を俟たねばならなかった。しかもそこでは松、桜、梅、柳、楓、春草、秋草など、それこそ歌にも詠まれた草花に交じって、薔薇や萱草、芙蓉、椿、躑躅、茶、竹などが描かれていた。それらは、従来歌のころと眼とが充分その美しさを捉え切れなかった花たち、と云つてよいだろう。言わば漢にまつわる草花と云うべきか。その草花を豊かに取り込む。そこには、これらの花を好しとする眼とところがあつたからに他ならない。つまり花や鳥に対する見方、価値観が大きく転換したと云つてよいだろう。まさしく花鳥の変である。だがこれによってわたしたちの先祖の花園はどれほど多彩になったことか。その新しい眼とところが見出した代表花こそが、牡丹であつた。

とは云え花鳥の変はこれに留まるものではなかった。さらに江戸時代に至れば、一層多くの花や鳥、生き物たちの庭が出現する。そんな江戸の花園はどんなであつたのだろうか。それを語る手掛りとして、ここでも蕪村の牡丹吟を挙げておく。

山蟻のあからさま也白牡丹



図1 牡丹孔雀図



図2 金谷園図(部分)

今年も働き終えた道具たちの年に一度の晴れ舞台、『暮らしのうつりかわり』を開催します。

美術博物館が所蔵する明治から昭和時代にかけての生活・生産道具を中心に紹介しながら、私たちの暮らしがどのように変わってきたのかをたどる展覧会です。いずれの道具も長年にわたり多くの方々から寄贈していただいたものであり、郷土の暮らしを伝える身近な文化財としての公開・活用の方も兼ねています。

かつて身近に使われていた伝統的な生活道具は、私たちの便利で快適な生活とひきかえに姿を消していききました。しかし、そうした古くさい道具には先人たちが長い年月をかけて築き上げ、伝承してきた生活の知恵や工夫がいつぱい詰まっており、かたや素材が変わっても新しい道具に受け継がれてもいます。古い道具からこうしたことを感じ取りながら、今の私たちの暮らしを振り返ってみましょう。

#### □暮らしの道具

昭和三〇年代から一般家庭に出回ってきた電化製品は、スイッチひとつで動くとても便利な道具で、それまでの

生活スタイルを大きく変えるものでした。ここでは、かつて私たちの暮らしを支えてきた道具をいくつかのテーマに分けて紹介します。とくに今回は、あゝ木挽が使った大きな木挽鋸をはじめとする山仕事の道具を取り上げます。様々な道具がいかに姿を変えて、私たちの暮らしがどのように便利になったのかを振り返ってみませんか。

#### □小学校

―むかしの教科書、今の教科書―

日本の近代学校制度は、明治五年（一八七二）に発布された学制とともに始まりました。その時から日本中に小学校がつくられ、学ぶべき教科が決められ、子どもたちは教科書を使って勉強してきました。ここでは明治から昭和戦前にかけての小学校の教科書と、今の小学生が学んでいる教科書を展示し、比較しながらご覧いただけます。子どもたちにとって当たり前の今の教科書が、大人世代には新鮮であり驚きでもあることでしょう。誰もが体験している学校生活語り合いながら、楽しくご覧いただけます。

#### □ひなまつり

三月三日の桃の節句には、雛人形を

飾って女の子の健やかな成長と幸せを祈ります。この年中行事は今でも全国各地で行われていますが、住宅環境の変化などにより大きく様変わりしています。ここでは桃の節句にあわせておひなさまと、素朴な愛らしさが人気の土人形からは天神人形を中心にご覧いただけます。子どもの誕生を祝い、健やかな成長を願い見守ってきたお人形たちをお楽しみください。

なお、本展ではこの時期の公立小学校三年生の社会科「古い道具と昔の暮らし」への学習支援を兼ね、子どもたちの見学に配慮した内容と工夫を凝らします。今回も、平日には小学校の団体見学があります。子どもたちにもむかしの道具の実物を間近に見てもらう機会を提供し、道具を大切にすることを感してもらい、そして、道具の観察からむかしの暮らしの様子をさぐり、暮らしのうつりかわりを考える手助けとなればと思います。

本展をつうじて、当館から寄贈者へ感謝の気持ちをあらわすとともに、私たちの身近にある品々を見直すきっかけのひとつとなれば幸いです。

## EXHIBITION

### 収蔵品展

# 暮らしの うつりかわり

伊藤久美子



昭和30年代 茶の間風景再現(平成28年度展覧会の様子)

会期：平成30年1月27日(土)～3月25日(日)

## 企画展

# クエイ兄弟 —ファントム・ミュージアム

展覧会紹介編

高見翔子



クエイ兄弟「ストリート・オブ・クロコダイル」より デコール《仕立屋の店内》1986年 photo©Robert Baker

アメリカ出身の「ブラザーズ・クエイ」は、主にアニメーション作家として知られており、イギリスを拠点に活動しています。本展は、彼らの創作とその源泉も含めてご紹介するアジア初の個展です。また二〇一二年にニューヨーク近代美術館で開催された回顧展および、二〇一四年にスペインを巡回した展覧会「変容」での内容を踏まえて、日本展用に再構成を行っています。本展では、五章の構成からクエイ兄弟の創作活動を振り返ります。彼らがフィラデルフィア芸術大学在学中に制作した作品をはじめ、強く関心を持ち影響を受けたポーランドのポスター、素描、アニメーション撮影のセットを再現したマケット、映像作品に登場したパペットやタイトルの原画、舞台美術のマケットやスチル写真など、初期作品から近年の活動に至るまでの展開をご紹介します。

双子のステイヴンとティモシーの

クエイ兄弟は、一九四七年にアメリカ合衆国ペンシルヴァニア州モンゴメリ郡の郡都ノーリスタウンに生まれしました。一九六五年に彼らはフィラデルフィア芸術大学（PCA）に入学し、ステイヴンは映画を、ティモシーは

## EXHIBITION

イラストレーションを専攻します。一九六七年、彼らが在学するPCAで「ポーランドのポスター芸術」展が開催され、この展覧会を目にしたことを機にクエイ兄弟はデザインのみならず、文学、音楽、舞台芸術といった、当時は東西冷戦のために閉ざされていた東欧の文化芸術に魅了され、強く惹かれるようになりました。そして、ポーランドのポスター芸術との出会いから、彼らは次第にアニメーション映画の制作に関心を持つようになっていきます。その背景には、「ポーランドのポスター芸術」展でクエイ兄弟が目にしたポスター・デザインを手掛けた作家たち「ヴァレリアン・ポロフチクや、本展においてもポスターが出品されているヤン・レニーツァなどが、アニメーション映画の制作も行っていること、そして文学を含む多様な芸術作品の存在が彼らの創作の源泉にありました。

一九六九年、PCAを卒業したクエイ兄弟はロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）に進学し、イラストレーションを専攻しながらも

映画制作を行うなどするうちに、その後の彼らにとって映画制作上の盟

友となる、当時は映画専攻の学生であったキース・グリフィスに出会います。RCAを修了後、アメリカで仕事をしながら制作を行っていたクエイ兄弟は、一九七九年に英国映画協会（BFI）に勤めていたグリフィスと再会し、映像作家として最初の作品『人工の夜景—欲望果てしなき者ども』を制作します。その後もアニメーション作品を制作しますが、特に一九八六年のカンヌ国際映画祭短編部門にノミネートされた『ストリート・オブ・クロコダイル』は、クエイ兄弟の代表作として知られています。一九八六年以降は、ミュージック・ビデオやコマーシャル、舞台芸術へと創作活動を広げているクエイ兄弟ですが、二本の長編実写映画の制作も行うなど精力的に活動を展開しています。

次号では、出品作品のご紹介を中心に、本展のみどころをお伝えしたいと思います。クエイ兄弟の作品は、どれもミステリアスで繊細ですが、なかには「ふふっ」と思わず微笑んでしまう作品もございますので、ぜひ愉しみながらご覧いただきたいです。

会期：平成30年4月7日（土）～5月20日（日）

当館には岡崎藩本多家の家臣史料として家老の都筑・中根・梶の三家をはじめ、緒方・伊藤・徳永などの各家の古文書を収蔵している。これらの家臣史料は岡崎藩の藩庁文書が伝来せず藩政史料がないなかではそれを埋める史料として貴重なものとなっている。

これらの史料は、岡崎市市史編さん事業や展覧会調査の活動のなかで、所有者との関係が始まり、寄附・寄託史料となり現在にいたるものである。調査での情報データも含めれば、その史料データは膨大なものになる。その収集には長い年月がかかっている。大分市に現存する家老の中根家の史料データはミニコピーフィルム二〇〇本にも及び、その調査とデータ整理に一〇年ほどかかった。

本多家家臣の追跡調査は容易ではない。大正五年に結成された旧岡崎藩士の集まりである「不忘義団」の昭和十五年頃の名簿があるが、名簿をもとに追跡することは、名前も住所も現状とは相違していることから、追跡には無理がある。たとえば東京市浅草区となっているので、

住所からは搜索するのは困難である。かつて、東京近郊で名簿を頼りに調査を行ったが、辿りつけたのは秋田家の一家だけだった。

史料収集には展覧会開催や史料集刊行により、当方から情報発信することで寄せられる情報が貴重である。とくに地域史料の場合、来館者による情報が追跡調査の糸口になることがある。本多家家臣については、かつて市で開催した「本多家とその家臣団」、「本多忠勝と子孫たち」の展覧会、さらには『中根家文書』上・下の刊行に関して、寄せられた本多家家臣情報には、中根、多門、佐野、阿部、生田の各家からのものがあつた。なかでも、中根家の文書群や、多門家の栄螺形兜などは、現在本多家関連の展示では欠かせない史料となっている。



多門家寄附の栄螺形兜

## EXHIBITION

佐久島は西尾市にある人口二五〇人ほどの島で、八〇%以上が里山です。島内のいたるところに野外アートがあり、島全体が美術館と言えます。佐久島は高齢化と過疎化の問題を抱え平成十三年から島の活性化を目指し「祭りとアート」をキーワードに様々なイベントを開催しています。そのなかで「佐久島アート・ピクニック」、「佐久島弘法巡り」のスタンブラリーを年間通し行っています。昔から人は何かと集めることが好きなんじゃないのかと感じていました。切手集め、ポケモン集め、ご朱印集め：色々を集めるものは変わっても集めている。：スタンブラリーが佐久島で行われていることも訪れる一つのきっかけになりました。

佐久島へ行ってみると汗ばむ陽気を通りこして汗が流れる天候に恵まれ、とても穏やかな空気。太陽を浴びてきらきら光る海。黒壁づくりの住宅。野外アート作品が迎えてくれました。素敵なお出迎えの数々に、自分自身、佐久島の魅力に心を撃ち抜かれてしまいました。島には五時間ほどの滞在でした。佐久島は何度訪れても新たな発見がありそうな素敵な島で

した。佐久島から帰ってから、穏やかな空気の作用か自分の性格が少し柔らかくなった様に思います。

近いはずなのに速く感じる。行きたかっただけで行ったことがない。そんな場所へパスポート会員様をお連れしたいという思いを叶えることが出来ました。豊かな気持ち、穏やかな気持ちになれる場所を探してたどりついた佐久島アート。島へ行くなんて大それたこと、実現できて本当に良かった。参加いただいた会員の方の楽しんでいただけている様子を間近に感じ、一年かけて練ってきた企画が成功した実感がわきました。島の方々、案内に付き添ってくださった方、バスの運転手さん、みなさんのご協力に感謝です。ご参加いただいたみなさんに喜んでいただき本当に良かった！です。今後もパスポート会員様の心を満たす企画をして岡崎市美術館を盛り上げていけたらと思っています。



## 平成三〇年度開催の展覧会

クエイ兄弟 ファントム・ミュージアム

四月七日(土)～五月二〇日(日)

本展は、アニメーション作家であるクエイ兄弟の制作の軌跡を、映像、素描、模型などを中心にその源泉も含めてご紹介します。双子が創り出すミステリアスで繊細な空間をお愉しみください。

名刀は語る 美しき鑑賞の歴史

六月二日(土)～七月二六日(月)

日本有数の刀剣コレクションを誇る「佐野美術館」の刀剣・刀装具を通して、日本人の美意識や文化を紹介します。さらに本多忠勝愛用の名槍「大笹穂槍(号蜻蛉切)」の出品に合わせて、本多家の名宝と三河の刀工の名品を展示します。

ジュルジュ・ブラック 宝飾デザインの輝き

七月二八日(土)～九月二七日(月)

二〇世紀初頭の芸術運動「キュビスム」に関わったジュルジュ・ブラックによるデザインの工芸作品を中心に紹介します。ジュエリーをはじめとする独創的できらびやかな工芸の世界をご覧ください。

明治二五〇年 博覧会にみる三河

九月二九日(土)～二月二日(日)

博覧会は地域自慢の品を競う場であり、出品物は地域の特徴を表しています。本展では日本の近代化に大きな役割を果たした明治時代の博覧会を通じて、三河の産業・技術の歴史を追っていきます。

美博びっくり箱―学芸員こだわりの逸品(仮)

二月二四日(土)～三月二四日(月)

岡崎市美術館博物館は、「マインドスケープ(心象風景)」を基本コンセプトに、岡崎の歴史から国内外の近現代美術まで、「心」を伝え、「心」を語る多様な美術品・博物資料を収集、展示してきました。専門分野が異なるそれぞれの学芸員が厳選したこだわりの逸品を通して、当館コレクションの多様な魅力をご紹介します。

暮らしのうつりかわり

一月二六日(土)～三月二四日(日)

所蔵品より生活・生産道具などを中心に紹介しながら、私達の暮らしがどのように変わってきたのか振り返ります。寄贈資料活用場でもあり、小学三年生の社会科への学習支援も兼ねた展覧会です。

## 山の上での休日

菊地真央

「駅から遠すぎる!」、「山の上なんて不便すぎる!」など、よくご意見をいただくように、当館は最寄駅からバスで三〇分以上かけた場所にあります。しかしここには当館の他に、近年オープンした魅力的な施設もございます。「展覧会は見たいけど遠くて気分が乗らないな…」と思われる皆様、次のような休日の過ごし方はいかがでしょうか。

当館は二〇時開館です。最寄りの東岡崎駅からは九時台に三本、一〇時台に二本のバスが出発します(土日祝)。二〇時過ぎにご来館いただき、展覧会をじっくり見れば丁度お昼の時間です。当館二階から向かつてすぐのレストランYOUR TABLEでランチをどうぞ。メニューは、山盛りの前菜から程良い焼き加減のメイン、食後のデザートとコーヒーまで大満足のボリュームと美味しさです。窓ガラス越しに山の景色を堪能しつつ、のんびりとした店内の雰囲気浸っていて、あつという間に二時間近く経ってしまいます。

ここで時計を見ると二四時過ぎ。バスは二時以降十七時台まで、一時間に二本通ります(土日祝)。周囲を散策

したり、再び展覧会をご覧ください(当日中の展示室再入場は何度でも可能です)。いよいよお帰りになる前には、是非当館二階のミュージアムショップYAGURAにお寄りください。伝統工芸の技とモダンなセンスが融合した洒落たインテリアなどこだわりの品々、そして展覧会毎に本店が選ぶ関連グッズも注目です。店内をくまなく見て回っても一六時前のバスに乗れば、帰宅ラッシュ前には電車に乗り込めます。

当館はさつと寄って帰れる場所ではございませんが、このようにむしろ一日かけてじっくり堪能できる場所として、来年度も是非、展覧会をご覧に、そしてゆったりした休日を過ごしにいらしてください。



ミュージアムショップYAGURA店内

# INFORMATION

## ■平成29年度収蔵品展

### 暮らしのうつりかわり

1月27日(土)～3月25日(日)

□ 子どもわくわく!教室(小学生対象)

日時:2月17日(土)、2月24日(土)、

3月3日(土)

各日とも午前10時30分～正午

□ 展示説明会

日時:2月17日(土)、3月11日(日)

各日とも午後2時～

\* 両イベントともに当日自由参加、参加費無料(ただし観覧チケットが必要です。)

□ 愛知県内の博物館・資料館などをめぐるひなまつりスタンプラリー

実施期間:2月3日(土)～3月11日(日)

参加費無料(ただし当館は観覧チケットが必要です。)

## 下ノ廊下

□ 50才を廻って登山の趣味がひとつ増えた。若い時から奥深い溪流でアマゴ、イワナを釣り現地で塩焼きにして頂く趣味もあり、野山が好きであった。旅行で長野県の駒ヶ岳にロープウェイ、登山2時間だが晴天で素晴らしい山々に感動したのがきっかけである。のち、年に2回ほど登山をしている。

□ 去年は黒部ダムからトロッコ電車最終駅の樺平まで概ね30km、通称「下ノ廊下」に。黒部峡谷の断崖絶壁にコの字形に切り抜いた登山道。道幅は場所によっては数十cmほどで番線の手すりがあるが反対は真下に黒部川、気が抜けない登山道である。支流は登山靴を脱いで渡り、岸壁からシャワーのように降り注ぐ冷たい水に負けずただひたすらに歩く。

でも目に入る景色は全てが新鮮で、まるで写真館であった。

□ この登山道は、電源開発の調査目的で作られ、黒部ダム建設当初は強力さんが相当な重量の資材を運んでいた。その名残から旧日電歩道とも呼ばれている。この道、この草木、この絶壁、この峡谷は世界遺産じゃないだろうか?この道どれだけの人が何年かで?とつぶやきながら歩く。暗くなり足は限界だが気持ちちは晴れのち晴であった。

□ 私は、こんな景色をまた見ようと次の計画をする熟年男性。(飯)

## おしゃべり、あれこれ。

## 街を知る、知らせる

自分の住んでいる街については、案外知らないことが多い。例えば観光地と言われる場所に住むと、お薦めの店や穴場の絶景スポットを尋ねられることもあるが、むしろその場所に住んでいない人の方が面白い場所をよく知っていたりする。美味しくても飾りつきのないレストランや、こだわりの書籍を並べた本屋など自分にとってお気に入り場所はあるけれども、他所からわざわざ来る人に紹介する程でもないか、と遠慮してしまう。2年前に岡崎に来てから、地元の方に素敵なお店や場所を紹介してもらった機会が多く、良い街だなあとしみじみ思う。外から来たばかりだと、どの人も「家康生誕の地」であることばかり言っているように感じられ、なんとなくポカンとしていたが、実際に住んでいる方と仲良くなると、人柄の良さや色々なお店の魅力から街の歴史を感じられ、味噌や家康よりもずっと印象深いエピソードが増えていく(もちろんその2つも大切です)。岡崎に住み、この場所について話せるようになって来て、ようやく自分の住む場所についてこれまで紹介できなかったことに情けなさを感じるようになった。今後新たに住む街では、もっと好奇心を持ってその土地について探ってみたいと思う。(菊)

編集後記 | いよいよ今年度最後の展覧会となりました。実は今年度途中から、受付の方が工夫を凝らしたお手製の飾りを受付スペースの所に置いてくださっています。ひとつ前の秋葉展では、チラシを何十枚も切り取って重ねた立体チラシが隠れた名作でした。今回の展覧会でも何か作ってくださるでしょうか...?皆様も是非受付をされる際には注目して見てください!(菊地)

表紙図版:新制小学算術教育掛図



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第73号 2017年2月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA